

上代人の表記意識と用字法

— 万葉集の訓法をめぐって —

鶴

久

本稿は「上代人の表記意識と用字法（未発表）」の一部をなすものであり、先に発表した「上代人の表記意識と用字法——特に万葉集における表記の省略される場合——（熊本女子大学紀要十五巻二号）」とも関連するものである。

(一)

：香切火之かぎるひの 燎流もゆる 荒野爾あらのに 白栲しろたへの 天領巾あまひれがくり 鳥自物とりじもの
 朝立伊行而あさだちいにて 入日成いりひなす 隠西加婆かくりにしかば 吾妹子之わきもこが 形見爾置かたみにあけ
 有も 緑兒之みどりこの 乞哭別こひなくことば 取委とりあたまふ 物之無者ものしなれば 男自物をとこじもの 腋挟わきばさみ
 持もち 吾妹子與わきもこと 二吾宿之ふたりわがねし……(二・二一三人麻呂)

右の歌の傍線を施した句は従来トリマカスル・トリマカスなどと訓まれてゐた。トリマカスは旧訓であり、別に紀州本・京大本緒にはトリツミシの訓も見える。マカスは二段活用動詞の終止形であり、下の物といふ体言を修飾してゐるので、連体形にしてトリマカスルと訓んだ注釈書もあるが、古くは終止形が連体修飾の機能を有してゐたこともあり、人麻呂歌や人麻呂集歌は勿論、集中の古い用例にも屢々そ

のやうな例が見出されることから、最近ではトリマカスルの字餘りをさけて、トリマカスと訓まれてゐるのである。ところで、この歌は二一〇番の「或本歌」であり、二一〇番の歌には

：蜻火之あさだちいまして 燎流もゆる 荒野爾あらのに 白妙之しろたへの 天領巾あまひれがくり 鳥自物とりじもの
 朝立伊麻之旦あさだちいまして 入日成いりひなす 隠去之かくりにしかば 吾妹子之わきもこが 形見かたみにあけ
 爾置有みどりこの 若兒乃こひなくことば 乞泣毎こひなくことば 取與とりあたまふ 物之無者ものしなれば 鳥德自物をとこじもの
 腋挟持わきばさみもち 吾妹子與わきもこと 二人吾宿之ふたりわがねし……(二・二一〇人麻呂)

とあり問題の部分は表記の字面に少々の差異はあるが、全く一致した表現をしてゐること、両歌全体からみても大部分が一致してゐることを比較考慮した場合「取委」と「取與」は用字に相違はあつても同じくトリアタフといふ語を表記する為に用ゐられた文字ではないかと思はれ、「取委」にもトリアタフの訓を施すべきではないかと考へるのである。委字にはマカス・サヅク・ユヅル・ユダヌなどの和訓もある如く、アタフとかなり接近した意味を有する文

字であり、アタフの訓の可能性がないこともない。ただし管見に入る限り、漢籍にも委字と興字と通用して用ゐられた例を未だ見出し得ず、和訓にもアタフの例を知り得ず、積極的にトリアタフと訓まねばならないといふ直接的根拠はない。しかし、例がないからといって強ち抹殺してしまふべきものでもなからう。不幸にして文献に姿をとどめてゐない場合もあるからである。中国における注にしても、和訓にしても、現存するものは幸にして遺影をとどめた、いはば限られたものであり、今日、我々の目にふれるものは極めて稀であるかもしれない。したがつて、他に全く傍証もなければ別問題であるが、前掲した如く、二一〇番の歌とその異伝歌と思はれる二二三番の歌が大部分、特に関係部分は全く一致してゐることを加味すればトリアタフの訓も捨てがたく思はれる。かりに和訓に委字に対するアタフの例を見出し得ないとしても、現存する和訓は主として内典・外典を訓読したものや、音義類を集めたものであるから、それにたまたま残存しなかつたのかもしれない。漢籍・仏典を訓読するといふことと、漢字・漢文を用ゐて国語を表記するといふことは、全く別の次元に属することであり、可能な限り漢字・漢文を駆使して日本語を表記した上代人の用字法を知れば、委に対するアタフの訓も不可能なことではない。意味的にトリマカスよりもトリアタフの方がはるかに秀れてゐることを思へば尚更である。集中に

は、例へば

：しましくは家に歸りて父母爾事毛告良比：（九・一七

四〇）

常世へに住むべきものを劔刀己之行柄おそやこの君

（九・一七四一）

うち日さす宮路を行くにわが裳は破れぬ玉の緒の念

妄家にあらしを（七・二二八〇人麻呂集）

命を幸く吉けむと石流垂水の水を結びて飲みつ（七・一

一四三）

天雲の退部乃限この道を行く人ごとに：（九・一八〇

一）

息のをに我はおもへど人目多みこそ吹く風にあらばし

ばしば応相物（十一・二三五九人麻呂集）

：甘南備の三諸の山は春去者春霞立秋往者紅丹穗經：

（十三・三三二七）

大船の猶預不定見者遺悶流心もあらず（二・二九六人麻呂

山のまゆ出雲の子らは霧なれや吉野の山の嶺霏微（三

・四二九人麻呂）

などの如く、今日では異様と思はれるやうな用字法をしてゐることを思へば、^①現在の一・二に固定した訓に拘泥することなく、可能な範囲の訓を適用することも意味があらう。特に、人麻呂歌や人麻呂集歌に特異な用字がかなり見

られることは周知のことでもあり、「たまかぎる」を表記するの「玉響(十一・二三九一人麻呂集)」とした如き一例、就中、二一〇と二一二番の歌と、二二三番と二一五番の或本歌の表記関係を考慮したとき、表記が異なつてゐるため別訓がなされてゐるが、それは改訓して同訓を施すべき例が両歌中に存在することからしても、今更贅言を要すまい。しかし、傍証のためあへて一言附言したいと思ふ。

前掲した二一三番と二一〇番の歌に見える

香切火之もゆる荒野に…(二・二二三)

蜻火之もゆる荒野に…(二・二二〇)

の香切火・蜻火は古く「かげろふ」と訓まれてゐたが、真淵の考が「かぎろひ」と施訓して以来、今日まで踏襲されてきた。香切火は香を力と訓むのは当然で、切はキルとこそ訓めキロとは訓み難く、万葉集の用字法からすればカギルヒと施訓するのが自然であり、語源が「カギル十火」と認められ、小島・木下・佐竹三氏の「万葉集」(以下三氏万葉集とする)にカギルヒとあるのは卓見であり、賛意を表する。とすれば、蜻火も香切火やかぎるひと同語源の玉かぎるの例からしてカギルヒと訓むべきではないか。蜻・蜻蛚は集中

(A) 玉蜻夕去来者(十・一八一六)

(B) 玉蜻石垣淵乃(十一・二七〇〇、二・二〇七)

(C) 珠蜻ほのかにだにも(二・二二〇)

玉蜻蛚ほのかに見えて(八・一五二六)

玉蜻ほのかに見えていにし子故に(十二・三〇八五)

の如く用ゐられ、(A)は「玉限夕去来者(一・四五)」、(B)は

「玉限石垣淵乃(十二・二五〇九)」、(C)は「玉垣入ほのかに

見えていにし子故に(十一・二三九四、靈異記上)」の傍例によつてタマカギルであることは異論がない。したがつて、

蜻・蜻蛚がカギルと訓めることは截然としてをり、「珠蜻」

「蜻火之」がともに同一長歌中で使用されてゐることに留意すれば、蜻火をカギルヒと訓むことは極めて穩当であらう。勿論、「迦芸漏肥(履中記)」の例も存在する

し、かぎろひの語の存在を否定するのではない。しかし、履中記の迦芸漏肥の存在によつて、かぎる火の存在を否定

する根拠ともなし得ない。かぎる火・かぎろ火は二重形と

見なされる。或いは、二一〇番の蜻火のみならず、

蜻火之もゆる春べと…(十・一八三五)

蜻蛚火之のころもえつつ…(九・一八〇四)

の蜻火・蜻蛚火もカギルヒと訓むべきかもしれない。更に

鳥自物朝立伊行而(二・二二三)

の行も

鳥自物朝立伊麻之弓(二・二二〇)

の例によつて、マシと訓み、「アサダチイマシテ」と施訓すべきであらう。行が、イマスと訓まれた例は

山越えて往座君をばいつとか待たむ（十二・三二八六）

月待ちて行わがせこそそのまにも見む（四・七〇九）

宜爾皇孫就而治焉 行矣（神代紀下一書曰）

の如く存在し、挽歌といふ点からすれば、イユクよりイマスが穩当であらう。

かやうに、二一〇番とその或本歌二一三番両歌の表記關係からして、二一三番の「取委」とある部分と全く一致する二一〇番の歌に「取與」となつてゐれば、委字に対するアタフの和訓こそ見出し得ないが、十分に傍証の役をはたしてゐると見做される。したがつて、代匠記初稿本書入れの「トリアタフ」の訓は刮目してよく、トリアタフを取委と表記する如きは人麻呂歌や人麻呂集歌には十分にあり得ることと、日本紀私記に見えるサツクの訓などを併せて考へると、積極的に「トリアタフ」と訓めるのではないかと考へるのである。むしろ、取委として、人麻呂歌の用字法もより深く把握され、上代人の言語意識・用字意識やそれに基づいて駆使した用字法も一段と理會できる。意味的にもトリマカスに勝るであらう。

考察した例は一例に過ぎないが、漢字、漢文にて表記されてゐる上代文献を訓む場合、その漢字の用法や用字意識

を知ることの如何に大切なことであるかは容易に推察できるであらう。それは、同一文字でも可能な限り色々な用法をしてゐるし、したがつて、漢字本来の表語文字としての用法においても、多くの訓みの可能性が存在してゐることを知り得る結果にもなるからである。加之、同一文字を訓仮名や音仮名として用ゐることもあり、時によつては漢字本来の意味用法によつた場合とそれを仮名として用ゐた場合が同一訓を有することもあつてその判断が曖昧になり、等閑にされてゐることも見逃してはならない。かかる場合にも、各々の漢字の意味用法や如何なる用字意識に基づいて表記されたものであるかを正確に把握しなければ、決して正鵠を得た上代文献の訓詁は望めないであらう。

以上の諸点から、万葉集に少しく言及してみようと思ふのである。

(二)

(1) 人言は夏野の草の繁くとも妹與吾師たづさはりねば
(十・一九八三)

(2) 天の川權の音きこゆ孫星與 織女今よひあふらしも
(十・二〇二九)

(3) 牽牛與 織女今よひあふ天の川門に波立つなゆめ
(十・二〇四〇)

(4) 白露與 秋芽子者恋ひみだれ別くことかたきわが心か

も(十・二二七)

(5)しき妙の枕をまきて妹^{いもと}与^{あれと}吾^{われと}寝る夜はなしに年ぞ経にける(十一・二六五)

の(1)より(5)までの傍線の訓はこれで別に誤りでもなく、又異説も見られない。しかしながら、與字本来の意味用法からすれば、前掲のままでは必ずしも正しい理解の仕方ではない。つまり、この場合の與字における漢文の用法は並列の意味をもち、国語の「――と――と」といふ場合に相当し、「□與□」「□□與□□」^三といふ形をなすものである。それゆゑに、「――と――と」と前にトを補読することは当然の理であり、(1)より(5)までの與字は仮名として用ゐられたものではない。ところが、例へば者字が国語でハ・バと訓んで正に適切な用法をしてゐるため、次第に訓仮名のハとして用ゐられるやうになつて行つたのと同様、国語の「――と――と」といふ語の表記に最も適応してゐるため、訓仮名的にトの表記に使用されるやうになつたからであらうか、(1)と(5)の與字も従来の注釈書は訓仮名的用法と見做してトと訓み、「――と――と」の下の「と」は單なる補読と見做したかと忖度される。それは與字の意味用法と用字法の把握を誤つたために起つた現象であり、(1)は「妹^{いもと}与^{あれと}吾^{われと}師^し」、(2)は孫^{ひこ}星^{ほし}與^と織^お女^な二^{つとめ}、(3)は「牽^{ひこ}牛^{ほし}與^と織^お女^な二^{つとめ}」、(4)は「白露^{しらつゆ}與^と秋^{あき}芽^{はぎ}子^こ者^は」、(5)は「妹^{いもと}與^{あれと}吾^{われと}」と見做すべきであらう。従来の注釈書は一、二の例に限つて部分的に

正しい把握はしても、全体的には極めて不統一な理解をしてゐたのである。この点三氏万葉集の訓みの深さと正確さには敬服させられる。

(6)言とはぬ木尚妹與兄ありとふをたゞ独り子にあるが苦しさ(六・一〇七)

(7)わたのそこ沖つ玉藻の名のりその花妹與吾ここにしありと名のりその花(七・二九〇)

(8)妹與吾手たづさはりて朝には庭にいでたち夕には床うちらはひ(八・一六二九)

(9)わが待ちし秋は来たりぬ妹與吾何ごとあれぞ紐とかざらむ(十・二〇三六)

(10)高山與海社者山ながらかくもうつく海ながらしかも直ならめ(十三・三三三二)

(11)玉ははき苅りと鎌麻呂室乃樹與囊本かきはかむため(十六・三八三〇)

(12)八重だたみ平群の山に四月與五月間爾葉がり仕ふるときに(十六・三八八五)

(13)ひとりのみ聞けばさぶしも君與吾へだてて恋ふるとなみ山(十九・四一七七)

の傍線の部も、従来、(6)「キスライモトセ」、(7)(8)(9)「イモトワレ」、(10)「タカヤマトウミコソハ」、(11)「ムロノキトナツメガモトト」、(12)「ウヅキトサツキノアイダニ」、(13)「キミトワレ」と訓まれてゐた。訓としては正しいものも

あるが、與字そのものの把握は當を得てゐず、前掲した三氏万葉集の如く、(6)は「木尚妹與兄」、(7)(8)(9)は「妹與吾」、(10)は「高山與海社者」、(11)は「室乃樹與三葉本」、(12)は「四月与三五月間爾」、(13)は「君與吾」と理解し、施訓すべきであらう。

(A) 汝乎与吾乎人ぞさくなるいであが君人の中言聞きこす
なゆめ (四・六六〇)

(B) 玉もりに玉は授けてかつがつも枕與吾者いざ二人ねむ
(四・六五二)

(C) こほろぎの待ちよろこぶる秋の夜を寝るしるしなし

枕與吾者 (十・二二六四)

だけは、それぞれ(A)「ナヲトアヲ」、(B)(C)「マクラトワレハ」と訓まれて異説がない。従来の訓みでは與字を単に訓仮名的用法と見れば問題ないが、與字本来の用法には反してゐる。(A)にしても前記した(7)(8)(9)の「妹與吾」、(13)の「君與吾」の用法に酷似してをり、意味的にも「ナトアトヲ」といふべきところであり、汝乎のをは色々と言もあるが、一種の間投助詞と考へられ、「ナヲトアトヲ」と訓むべきではなからうか。汝に対して吾とあるのは必然的な訓であり、「ナヲトアヲ」とする従来の訓では単独母音を含む定数音で準不足音句にもなり、その不安を解消する意味でも、多少変則的ではあるが漢字本来の意味機能による

用法と見做し、「汝乎與吾乎」とするのが良ささうである。

うちなびく春の柳等わがやどの梅の花等遠いにかわ
かむ (五・八二六)

は参考例となるであらう。

(B)は「枕と吾」が並列的な意味でなく、不足ながらも枕と私はねようといふのが従来の考へであるが、「いざ二人ねむ」とあるから「枕と吾と二人」であることは自明のことであり、作者は「かつがつも(不足ながらも)」と感じるのも自分だけでなく、枕即ち娘の枕も同様と思つたのではなからうか。さうして始めて「いざ二人ねむ」の結句も生きてくるやうに思はれる。つまり、枕と吾は並列的と見られないであらうか。(C)にしても「枕とねるのがしるしなし」ではなく、「しるしがないのは枕と私と」ではなからうか。もし、さうだとすれば(B)(C)ともに「枕與吾者」として、與字本来の意味機能により訓読できることとなる。

(三)

前項で與字について述べたが、何も與字にのみ限られたものではなく、之・哉・也などの漢文の助字においても同じ事情にあると思はれる。

哉字は専らやと訓み慣はされた後世人の語感によつて

か、ヤと訓んで少しも疑念をもたれることはなかつた。しかし、哉字は漢文の助字として用ゐられるとき、我國の助詞ヤ・カの用法に適合するので、ヤは勿論力を表記する場合にも使用されることにより、佐伯梅友博士「万葉集の助詞二種（万葉語の研究所収）」や沢瀉久孝博士「『か』より『や』への推移（万葉の作品と時代所収）」はや・かの本質・相違を明らかにし、従来ヤと訓まれてゐた哉字も再検討され、カと訓むべき例はカと訓み改められ、その他にも尚カと訓むべき哉字の例が存在することを予想して問題を提示されたのである。そして、三氏万葉集では更にその例を加へられた。（二八〇、七六七、一〇五八、一七三〇、一六六六、一四三五、三二二三、一一一一、二二一八、一七三四などの諸例）

や・か二者の意味的相違などについては前記の佐伯・沢瀉両博士の御論考に詳述されてゐるので、それによるとしても、哉にはまだ再考の余地が残つてゐるやうである。

(イ) 勝牡鹿のままの手児名がおくつきをこことは聞けど

まのは しけりたるらむ
真木葉哉茂有良武…（三・四三二）

(ロ) 吾耳哉如是恋為良武かきつはたにつらふ妹はいかにか

あれのみ かくこひすらむ
あるらむ（十・一九八六）

(ハ) 恋死なば恋死哉わぎもこが我家のかなと過行（十一・

二四〇一）

(ニ) みどり子の為此乳母は求むといへ乳飲哉君之於毛求

覽（十二・二九二五）

これらの哉はこれまでヤと訓まれて全く異論のない例である。ところで、この哉はすべて現在推量を表はすと言はれてゐる助動詞「らむ」と呼応してゐる。所謂推量の助動詞らむが疑問の係助詞を受けるときは、やをうけることは殆んどなく、

うらみする人とは知らに海部等可^{あま}見良^{かみ}牟（十九・四二〇）

(二) 倭には鳴而^{なきて}歟^か来良武（一・七〇）

おほほしく待加^{まちか}恋良武はしき妻らは（二・二二〇）

裳の裾ぬれて阿由可^{あゆか}都流良武（五・八六一）

若草の夫香有良武^{つまかあるらむ}かしのみの独歟^{ひとりか}将^{まさ}宿（九・一七四二）

かは花の恋ひて香眠良武^{かぬらむ}きそも今夜も（十四・三五〇五）

吹き乱る風に加妹^{かいは}之梅乃散覽^{うめのちるらむ}（十・一八五六）

月夜よみ門に出で立ち妹可^{いも}將^{まさ}待（四・七六五）

の如くかをうけ、万葉集だけでも枚挙に遑がない。

今日も可母大宮人の玉藻^{たまも}茹良武（一・四二二）

なばりの山を今日歟^か超良武（四・五二一）

今香開良武^か山ぶきの花（八・一四三五）

しほつ菅浦今香將^か榜（九・一七三四）

さぶし弥可^{みか}念而寝良武^{おもひてぬらむ}くやし弥可^{みか}念恋良武（二・二二一）

七)

言はれし君は與孰可宿良牟(四・五六四)

いづち向きて可あがわかる良武(五・八八七)

いつし可毛使の来むと未多須良無(十八・四一〇六)

たむけ草いく世までに箇年は経濫(九・一七二六)

の如く、今日、今或いは形容詞の語幹につくミ語尾に接したり、疑問副詞をうける疑問の係助詞は「か」であるのは、係助詞「や」との相違を示すか本来の意味機能によることは勿論であるが、助動詞らむに承接する係助詞にやがなく、すべてかであり、「らむか」の例しか存在しないことは注目されねばならない。助動詞らむと呼応する係助詞がかであることは「らむか」の例からして当然のこととして理會され、少くとも係助詞やとらむとの呼応は本来的のものでないことは断言できさうである。したがって、

せの山にもみち常しく神岳の山のもみちは今日散濫(九・一六七六)

において、「今日か」とかを補読したことは今日とらむとの承接や呼応からして、他の集中の用例が示す如く極めて適切な処置である。

にきたつに舟乗せむと聞しなへ如何毛君が見え来ざる

らむ(十二・三三〇二)

の第四句も、従来「ナニゾモ」と訓まれてゐたが、三氏万葉集によつて「ナニカモ」と訓まれたのは従ふべき定訓で

あらう。前掲した(イ)と(ニ)の哉字もらむとの呼応からして当然力と訓み改めねばなるまい。少くとも、本来はヤとあるべきではない。かといつて、らむがかでなくやをうけた例は左の如く皆無ではない。即ち、

(a) ありそやにおふる玉藻のうちなびき一人夜宿良牟あを待ちかねて(十四・三五六二)

(b) 潮早みいそ廻にをれば潜きする海人鳥屋見濫旅行く我を(七・二三三四)

(c) 白妙の藤江の浦にいざりする安麻等也見良武旅行く我を(十五・三六〇七)

(b) 松が枝の土につくまでふる雪を美受豆也妹がこもりをる良牟(二十・四四三九)

(e) 旅にあれど夜は火ともしをる我を也未爾也妹が恋つつ安流良牟(十五・三六六九)

などであるが、かかる例は東歌や時代的に新しい歌に限られてをり、沢瀉博士(前掲著)が言はれてゐるやうに、「か」から「や」へ推移したあとを示してゐるのであつて、(a)の歌は

ながらふるつま吹く風の寒き夜にわがせの君は独香宿良武(一・五九)

ただ一人いわたらす子は若草の夫かあるらむかしのみの独歟将宿(九・一七四二)

玉かつま島熊山の夕ぐれに獨可君之山道^{ひとりみきみがやまぢい}將超^{こゆる}（十二・三一九四）

敷妙の衣手かれて玉藻なす靡可宿^{なびきかぬ}濫^{らむ}を待ちかてに（十一・二四八三）

などの例によつて、(b)の歌は

ふぢなみをかりほに作り浦廻する人とは知らに海部等^{あま}可見良牟^{かみらむ}（十九・四二〇二）

の傍証例によつて、大凡の推察はつくであらう。加へて、(c)の歌は

白妙の藤江の浦にいざりする安麻等也見良武旅ゆく我^{あま}を（十五・三六〇六）

柿本朝臣人麻呂歌曰安良多倍乃^{あたらたへの} 又日須受吉都流^{またひすうきちゅう} 安麻登香見良武^{あまとみらむ}

とあるので、人麻呂歌の異伝歌であり、卷二の二五二番の歌と同歌であることが、卷二一の柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首（二四九・二五六）と卷十五の三六〇六・三六一〇番の歌とを比考して明らかであり、その同歌（二五二番）が、

あら妙の藤江の浦にすずきつる白水郎跡香將^{あま}見旅^{みらむ}ゆくわれを（二・二五二）

一本云白栲乃藤江能浦爾伊射利為流^{しろたへのあえのうらにいざりする}

とあるのを考慮すれば、もともと「か」とあつたのが伝承の間に「や」に誤伝されたことは歴然としてをり、「か」

より「や」へ推移してゆく間の事情をこの一例にしてあますところなく言い尽してゐると言へよう。古今集においてさへも、化石的にせよ、疑問語とともにかはが用ゐられてゐる例が残存してゐるほどで、かがやへ完全に移行してしまふのは平安朝時代になつてからであり、奈良時代では集中の新しい歌でも「か」とあるのが普通で、やはり「や」とあるのは特殊な例と見做されるのである。しがつて、やとらむが呼応した僅少例が前述したやうに存在するからといつて、それらを用例として(イ)の哉をやと訓まねばならぬ理由にはならない。むしろ、積極的に(イ)は「マキノハカ」、(ニ)は「チノメカ」、(ロ)は「ノミヤ」とあれば、「アレ」をうけるのが常道であるが、

妾耳鴨君に恋濫^{あのみかも} 吾耳鴨君に恋ふれば^{あのみかも}（十三・三三二九）

三二九

の傍証例もあるからして、「アレノミカ」よりも「アノミカモ」とそれぞれ改訓するのが穩当であらう。哉はかと訓むのは勿論

わが染めし袖沾在哉^{めれにけちかも}（七・一二四九）

この二夜千年の如も吾恋哉^{あはこふるかも}（十一・二三八一）

久方の天の露霜沾在哉^{めれにけるかも}（十一・二三九五）

桜花開哉散ると見るまでに^{さきかも}（十二・三二二九）

の如く「カモ」とも訓めるのである。(ハ)の哉もらむと呼応

してゐることは言ふまでもなく、格助詞とに承接した係助詞はやの例はありはするが、やもはなく、か・かもの例の約三分の一に過ぎず、前に考察した「あまとか↓あまとや」の関係を見ると、かが本来的なものと思はれ、傍証例

夢にだに見えばこそあらめかくばかり見えしあるは
こひてしねよか

恋而死跡香(四・七四九)

もあり「注釈」の如く「コヒモシネトカ」と施訓するのが当を得るよう。ところで、(ハ)と酷似した同じ人麻呂集

歌

恋死こひしなほこひもしねよ 恋死 耶玉よたま ぼこの…(十一・二三七〇)

の耶も従来はヤと訓んでゐるが、耶かの例が同じ人麻呂集歌(例へば十一・二五二三)に存在するし、「注釈」の説に従ひ(ハ)と同様「コヒシナバコヒモシネトカ」と訓みたいと思ふ。

されば、従来「ヤ」とのみ訓んで全く疑はれてもみなかつた、推量の助動詞らむと呼応してゐる也字の例

(ホ)神風の伊勢の浜荻をりふせて客宿也たひね將すむ為あらき浜辺

に(四・五〇〇)

(ヘ)広瀬川袖つくばかり浅乎也あさきむ心ふかめてわが思へる良武らむ

(七・一三八一)

(ト)梅の花散らす春雨いたくふる客爾也たひに君がいほりせる

良武(十・一九一八)

(チ)なぞ鹿のわび鳴きすなるけだしあきののはぎも秋野之芽子也しげく
將ちるらむ落(十・二一五四)

は再考してみる必要もあらう。也の音はヤであり、漢文の助字として使用される場合にも国語でヤと訓むべきところに多く使用されてゐたため、後世人のヤと訓慣れた語感からは、漢文の助字として用ゐられた也字についての一步進んだ考察は死角になつてゐたのではあるまいか。

也字が漢籍において疑問辞として多数用ゐられてゐることは周知のことであり、王引之の経伝釈詞や楊樹達的高等国文法が、耶・歟・哉・乎など通用して疑問辞として用ゐられてゐることについて、用例を挙げてかなり詳述してゐるので、これ以上の贅言は要すまい。したがつて、我国においても漢文の助字として疑問を表示するときに、耶・歟・哉のみ用ゐて、カと訓むべく也字を用ゐないといふのは極めて異様なことである。人によつては好みによつて耶・歟・哉を用ゐて也を用ゐなかつたといふこともあらう。しかし、従来の訓によれば万葉集に也かの例は皆無である。上代における漢字・漢文の駆使、多彩を極めた万葉集の用字法からすれば、カと読むべき也字の例があつても決して不思議ではなく、その方がむしろ自然である。

汝者誰也(記中・他に二例)

汝者誰子也(記中)

是有何表也(記中)

の如き、耶・哉・歟・乎などと通用して用ゐられた疑問辞也字は神武記のみに偏在して、古事記全体からすれば阪倉篤義博士「上代の疑問表現から(国語国文27巻11号)」が先年指摘されたやうに、確かに例外的である。しかし、古事記にかかる疑問辞也の例が見えることは注目され、よし記全体からは例外的ではあるにせよ

一書曰……伊弉册尊曰吾夫君何来之晚也(神代紀上・新訂)

国史大系上P14ノ9以下同じ)

若然者將何以明爾之赤心也(神代紀上・右同P25ノ9)

素戔鳴尊問曰汝等誰也(神代紀上・右同P40ノ7)

祈之曰朕礼神尚未尽耶、何不享之甚也(崇神紀・

右同P160ノ4)

天皇聞其歎而問之曰汝何歎息也(履中紀右同P330ノ2)

豈若顯名被害也歟(顯宗紀右同P402ノ1)

答曰何愛一女以取禍乎、如何不過命也(欽明紀下

P94ノ1)

然臣取之輕誰王也重誰王也(舒明紀下170ノ6)

の如き、約六十例の日本書紀の例を加味すれば、耶・哉・乎・歟など何等区別することなく疑問辞の表現に用ゐられ、也字を疑問辞として用ゐることは普通のことであつたと認められる。勿論、疑問辞のみならず、他の用法の也字

の有無や多寡は日本書紀の巻により相違してゐるのであつて、それは日本書紀の用字法の研究に一役を投じ、之・者・焉・耶・歟・哉・矣などの漢文の助字とともに紀の筆録者、編纂者の複数性、資料や編纂過程の推定にも関係するであらう。かやうに記・紀における也字の例からすれば、万葉集にカと訓むべき也字の例が全く見られないのがむしろおかしいくらいである。らむと呼応する係助詞がやでなくかであれば、也が助動詞らむと呼応してゐる(らむ)の也字もカと訓んで差支へないであらう。やと呼応したらむの例が例外として少々あつたとしても「か」より「や」の推移が考へられ、そのやうな例は当時としては特殊な例と見なされるから、(らむ)の也にカと施訓することを否定する根拠にはなし難い。ただ、(べ)の例は「浅乎也」「客爾也」と音仮名乎・爾に接してゐるので、也も音仮名として使用されたとも見られる。音仮名であればヤと訓むべきことは言ふまでもない。しかし、之・者・焉等の漢文の助字の用法が多岐で、集中最も多い巻十に存在し、巻十に次いで多い巻七の例であることを思ふとき、

神なびの淵はあせにて瀬二香成良武(六・九六九)

はなにかまみがうつろひぬらむ

息の緒に思へる我を山ぢさの花爾香公之移奴良武(七

・一三六〇)

の如く、(ト)の歌と表現形式を同じくした歌も存在し、必ず

しも音仮名とばかりは断言できないやうに思はれる。同一箇所や同一語の中で、音仮名・訓仮名を混用することは極めて稀であるが、皆無ではない。音仮名が使用されたら音仮名を、訓仮名であれば訓仮名を用ゐる傾向が強いことは確かではあるが。

也字は既述したやうに疑問辞として用ゐられた場合、カ
の表記に当てられることもあり、したがつて、カとも訓める
し、集中にも僅かながらそのやうな例があるとすれば、他
の也字に言及するのも意味があらう。

(リ)明日よりはいなむの川の出でていなば留まれる我は
恋乍也將有(十二・三二九八)

(又)三島管いまだ苗なり時またば不著也將成三島管笠(十
一・二八三六)

の也も、これ迄やと訓まれて疑念をもたれたことはなかつ
た。(リ)は

十月しぐれの雨に沾乍哉君が行疑宿可借疑(十二・三二
一三)

草影のあらゐの崎の笠島を見乍可君が山道超良無一
云三坂越良牟(十二・三二九一)

山科の石田の小野の母蘇原見乍哉公之山道越良武(九
・一七三〇)

人見ずはわが袖もちてかくさむを所焼乍可將有着ずて

来にけり(三・三六九)

やみの夜に鳴くなる鶴のよそのみに聞乍可將有あふと
はなしに(四・五九二)

わぎもこにあふよしをなみ駿河なる不士の高嶺の焼管
香將有(十一・二六九五)

霞たつ春の長日をおくかなく知らぬ山道を恋乍可將来
(十二・三一五〇)

などの例を加味し、(又)は

わが盛り又をちめやもほととに奈良の都を不見歟將
成(三・三三二)

吉野川河浪高みたきの浦を不見歟成嘗恋しけまくに
(九・一七二二)

紫の名高の浦にまなごつち袖のみふれて不寝香將成
(七・一三九二)

暇なみ五月をすらにわぎもこが花橘を不見可將過(八
・一五〇四)

ありそこす浪をかしこみ淡路島不見哉將過去ここだ近
きを(七・一一八〇)

みまくほり恋つゝ待ちし秋はぎは花のみ咲きて不成可
毛將有(七・一三六四)

などの例を参照すると、カと訓むのが自然に思はれる。た
だ、左の二例を併せて考へて、(リ)(又)の也はやはり従来通り

ヤと訓んだが良いのではないかと思はれるかもしれない。

たきぎこる鎌倉山のこだる木をまつとなが言はば古悲
都追夜安良牟(十四・三四三三)

かの子ろと宿受夜奈里奈牟はだすすきうら野の山に月
かたよるも(十四・三五六五)

しかし、この二例は東歌であり、前記したやうに東歌には
もともと「か」とあるべきものが「や」となつてゐたこと
を想起していただきたい。さすれば、東歌の二例によつて
り(ハ)の也が絶対にヤと訓まれねばならないといふわけにも
いかない。かへつて、

あしひきの山さなかつらもみつまで妹爾不相哉吾恋将
居(十・三二九六)

白妙のたもとゆたけく人のぬる味宿者不寝哉恋将渡
(十二・二九六三)

もみち葉の過ぎかてぬ子を人妻と見乍哉将有恋しきも
のを(十・三二九七)

しなが鳥るな山とよに行く水の名のみよそりて恋管哉
将在(十一・二七〇八一云)

高麗劔わが心からよそのみに見乍哉君乎恋渡奈牟(十
二・二九八三)

などの哉も諸注にヤと訓まれて何ら懸念をもたれてゐない

が、或いはカと訓むべきかもしれない。

(四)

第三項では哉・也の漢文の助字について、卷の用字法を
考慮しながらも集中全体からとらへて考察したが、対象に
よつては卷・或いは特定の歌集・作者を中心として、そこ
から迫まらねばならないこともある。一口に万葉集といつ
ても二十卷あり、その用字や表記の方法には卷によつてそ
れぞれ特徴が見られるからである。それは資料の種類や筆
録者の相違によることもあらうし、卷々の編纂者、蒐集者
がそれぞれの言語意識・用字意識に基いて表記したのが混
跡として残つてゐることもあらうし、卷の成立事情・成立
過程・編纂者・筆録者・資料となつたもの等を推定する端
緒にもなるので、用字法の研究には看過することのできな
い興味ある事実である。

卷十の用字法が他の卷に比し、非常に特異な存在である
ことは、これまで度々言はれてきたことである。その特色
の著しい一例は之・者・焉などの漢文の助字が他の卷に比
し多く用ゐられ、広範囲な用法をしてゐることである。こ
こでも、之字を例として卷十における漢文の助字・字の
用法をより深く理会すべく訓詁を試みたい。

(1)

白雪之常敷冬者過去家良霜春霞田菜引野辺之鴈鳴焉
しらゆきのとこしきふゆはすぎにけらしもはるかすみたなばくのべ
ちひひなくも

(十・一八八八)

右の旋頭歌の第五句「田菜引野辺之」は従来「たなびくのべの」と訓読されて何等異説を見なかつた。之字は普通ノ・ガ、音仮名としてシの表記に専ら使用されるから、字面からして「タナビクノベノ」は最も当を得た訓と考へられ、他に別訓を施す余地の存在など思ひもよらぬことである。しかしながら、「ノベノ」と訓めば「の」は所有を示す格助詞と見られ、第六句の「うぐひす」にかかつてゐると思ふべきではない。即ち「野辺のうぐひす」といふこととなる。ところで、一首全体からの意味を考へるに「春霞のたなびく野辺のうぐひす」が鳴くといふのは少々異様に思はれる。勿論、そのやうな表現は理論的にあり得ないことはなく、意味が通じないこともないが、「春霞がたなびいてゐる野辺でうぐひすが鳴いてゐる」といふのがより一首の意を尽してゐると見做される。したがつて、「たなびくのべの」でなく「たなびくのべに」とありたいところである。古典文学大系は「たなびくのべの」と施訓はしても「たなびく野辺にウグヒスがないてゐる」と口語訳してゐるほどである。訓に対する口語訳は勿論違つてゐるが、意味上訓に忠実であつては一首すつきりせず、「のべに」とせざるを得なかつたのであらうと忖度される。当時の表現法に照合しても「春霞たなびく野辺のうぐひすがなく」といふのは普通ではなく、用例は、

わが園の竹の林爾^にうぐひす鳴くも(五・八二四)
梅の花散りまがひたる岡^にび爾波^にうぐひすなくも(五・八三八)

まづわが宿爾^にうぐひすは鳴け(二十・四四九〇)

高まど爾^にうぐひす鳴きぬ(六・九四八)

我家のその爾^にうぐひす鳴くも(八・一四四一)

柳のうれ爾^にうぐひす鳴きつ(十・一八一九)

山^に二も野^に二もうぐひすなくも(十・一八二四)

しのうれ爾尾羽^にうちふりてうぐひす鳴くも(十・一八三〇)

春野庭君^にをかけつつうぐひすなくも(十・一八二五)

山^にのま爾^にうぐひす鳴きて(十・一八三七)

木ぬれが下爾^にうぐひす鳴くも(十三・三三二一)

竹の林爾^にうぐひすはしば鳴にしを(十九・四二八六)

この夕陰爾^にうぐひす鳴くも(十九・四二九〇)

春の野爾^になくやうぐひす(五・八三七)

野づかさ爾^に今は鳴くらむうぐひすの声(十七・三九一五)

の如く、すべて「——に——なく」であつて、「——のうぐひすがなく」といふ例はない。かかる例は何も驚に限つたことなく、

山爾も野爾もさを鹿なくも(十・二四七)

白露のおくこの庭爾こほろぎ鳴くも(八・一五五二)

白波爾かはづ鳴くなり朝夕ごとに(十・二六四)

わが背こが古家の里の明日香庭千鳥なくなり(三・二六八)

やその湊爾たづ多になく(三・二七三)

吉野なるなつみの川の川よど爾鴨ぞ鳴くなる(三・三七五)

天雲爾雁ぞなくなる(二十・四二九六)

の如く「――」の「――」がなく」といふ表現はなく、すべて「――」に「――」なく」の例ばかりであることは、いよいよ「野辺之鶯鳴焉」に対する「ノベノウグヒスナクモ」は不自然に感じられる。もし、之をノと訓まないとすれば如何に訓むべきであらうか。ガ・シでは一段と不適切である。或いは、之字は書写間に誤写されて現存写本に伝へられてゐるのであらうか。誤写とすれば何字の誤写であらうか。現存する我国の古典は一・二を除いて、写本によつて伝へられてゐる。何百年もの間に転写に転写が重ねられれば誤写は当然のごとく起り得る。正倉院文書に残存する写経生の記事を見るまでもなく、現在の日常生活においてもままあることである。少くとも古典をひもとく者は本文批評を目的としない場合でもたえず相遇することである。したがつ

て、之字が誤字である可能性はないことはない。もし、誤字とすれば「二」の誤写である可能性が強い。といふのは、万葉集の古写本にも例がある如く久・之・疊字「ミ」の誤写は極めて多く、疊字「ミ」と「二」の誤写も多く、「二」↓「ミ」↓「之」といふ誤写の経過も自然に理會される。次にその一例を示してみよう。

二走良武(四・五五二)

神左ニ「ミ」アリ

中々爾(四・七五〇)

神「中之荷」トアリ、右

ニ訓ト同筆ニテ「中々余奈何」トアリ

時來々(十・二〇二三)

元類神「ミ」西細温矢京

無附「之」

五十母不宿二(九・一七八七)

元「之」藍「之」

夜之深去良久(十・二〇七二)

元「ミ」

夜之深去良久(十・二〇七二)

神京「之」

出乃渡丹(十・二〇八九)

元神西温矢京「ミ」類「之」

急之吹來(十・二一〇八)

元神温矢「ミ」

花爾散去流(十・二二二六)

神「之」左ニ爾アリ

小竹之於爾(十・二三三六)

神「之」

このやうに、初め「二(或いは爾も考へられる)」とあつた本文が疊字「ミ」に誤写され、更に「之」に誤つて行つたと推定される可能性は十分認めつつも、他に全く解決、解釈

の方法がなければまだしも、古写本一致して「之」とあるのを、一言のもとに誤写とは断定できない。誤写としなければ如何に考へるべきであらうか。

ここで、問題歌が之、者、焉など漢文の助字の用法が複雑多岐にわたる卷十の歌であることを想ひ起していただきたい。結論から述べると、問題の之字は漢文の助字の一用法に従つて、存在場所を表示する「に」を表記したものと見なし、ニと施訓すべきものと考へられる。中国においては副詞・客語となつた体言についた之字の用法があり、我國の格助詞に相当するところに用ゐられることもあるからして、その用法が模倣・応用されたものと見られる。例へば

昨夜夢之有ニ貴人一（崇神記新訂増補 国史大系上 P 160）

村之無レ長。邑之勿レ首（景行紀右局 P 213）

の之字はニと訓んでまさにぴつたりであり、

是夜夢有ニ貴人一（崇神紀右局 P 160）

是国郡無ニ君長一。県邑無ニ首渠ニ者焉（成務紀右局 P 226）

の如く、必ずしも之字を表記せずともよい。之字が表記してあれば、副詞、客語となつた体言についてそれを強調してゐることが確認され、之がないよりもより判然とする。したがつて、「キノイメニ」「ムラニ」「サトニ」などと訓んで妥当してゐる。「春霞田菜引野辺之」の之字も前

記日本書紀の之字と同一手法によるものと見なされる。卷十には、例へば

○梅の花我は散らさじあをによし平城之人來つつ見るがね（十・一九〇六）

玉津島よく見ていませあをによし平城有人之まち問はばいかに（七・二二五）

○あづさ弓春山近く家居之つぎて聞くらむ鶯の声（十・一八二九）

梅の花さける岳辺に家居者ともしくもあらず鶯の声

（十・一八二〇）

○春之在者妻を求むとうぐひすの木末を伝ひ鳴きつつもとな（十・一八二六）

春之在者もずのくさぐさ見えずとも我は見やらむ君があたりをば（十・一八九七）

春之在者すがるなす野のほととぎすほとと妹にあはず来にけり

○一目みし人に恋らく天霧之ふりくる雪の消ぬべく思はゆ（十・二三四〇）

夢のごと君をあひ見て天霧之ふりくる雪の消ぬべく思はゆ（十・二三四二）

天霜相ふりくる雪の消なめども君にあはむとながらへ

わたる（十・二三四五）

の如き之字の用例があり、之を存在場所を表示するにの表記にあてたとしても少しも異様ではない。むしろ、集中は勿論卷十における之字の統一的理解の上に立ち、「野辺之」と解釈して、卷十の之字の用法はより深く理會できるわけであり、卷十の用字法の特色の一面を更に明らかにする結果にもなるのである。

（2）

大夫之伏居嘆而造有^{ますらをのふしおなげきてつくりたる}四垂柳之^{かづらやなぎ}繭爲^{なつ}吾妹（十・一九二四）

この歌は諸注釈書「ますらををのふしゐなげきてつくりたるしだりやなぎのかづらせわぎも」と訓んでほとんど異説がなく、現在では疑をはさんだものではなく定説化してゐる。

たゞ古義だけは、第四句の「之」を「曾字の極草より誤まれるなるべし」といつて「シダリヤナギゾ」と訓んでゐる。しかし、古写本一致して「之」になつてをり、それを簡単に誤字のもとに一掃するが如き方法に対する極めて批判的である近代の方法論からすれば、新考以外に古義の踏襲者がなかつたのも当然なことである。意味も従来の訓で不可といふことはなく、今日まで異見のでなかつたのも諾なはれる。それにしても、古義が掲げてゐるやうに、

吾^{わが}時^{まけ}早^{はや}田^の之^の穂^ほ立^{たち}造^{つく}有^{あり}繭^{なつ}曾^{なつ}見^み乍^は師^し弩^は波^は世^せ吾^{わが}背^せ（八・一六二四）

の例を加味すると「しだり柳の繭をしなさい。お前」といふよりも「しだり柳の繭だよ。だから繭としてつけなさい。お前」といふ方が上句の「大夫之伏居嘆而造有」に對して自然な続き具合であり、作者の真意もより一層くみとれる。かかる意味上からすると、第四句は諸注の説よりも古義のやうに「シダリヤナギゾ」とありたいところである。

ところで、もし「しだりやなぎぞ」と訓めば本文の之字は如何に解釈すべきであらうか。古義の如く誤字説によれば事は簡単であるが、古写本一致してゐる之字を、曾と誤つたといふ必然的な理由や之と曾が誤つた実例や可能性があればまだしも、何の根拠もなく誤字と断定することはできない。だが、シダリヤナギゾと訓む説を断念するのは早急に過ぎる。之字が漢文の助字として、者と通用してハ・バと訓まれるべく用ゐられたり、者・也・焉・矣などと同じく語末助字として用ゐられ、時には「ゾ」「ナリ」なども訓まれることは記・紀をはじめ上代文献にはまゝ見られることであり、当面の問題歌の之字をゾと訓むことは不可能でない。しかも、この之字が也・者・焉などの助字とともに、之字のもつ意味機能の範囲で色々の用法をしてゐる卷十の歌中に見られることによつて、卷十の歌の表記者の用字意識を一段と把握することができ、卷十の用字法の特色を更に深く理會する結果にもなるのである。即ち、之字

をゾと訓んで始めて、作者の気持は生き生きとしてき、意味上はいふまでもなく、表現形式を全く同じくする、

夏瘦爾吉跡云物曾武奈伎取喫なつやせに よしど いふものぞむ なまきとりめせ (十六・三八五三)

春野爾拔流茅花曾御食而肥座はるのにぬける つばな ぞめしてこえませ (八・一四六〇)

漢人毛 棧浮而遊云今日曾和我勢古花蔦世余からひともし いかたうかへて あそぶといけふ ぞわがせこはなかつらせよ (十九

・四一五三)

鷲之鳴吾鳥曾不息通爲うぐひすの なくわがしまぞやまず かよはせ (六・一〇二二)

龍上乃馬酔之花曾置末勿勤たきのうへのおしびのはなぞはしにおくなゆめ (十・一八六八)

赤駒之足我枳速者雲居爾毛隱徃序袖卷吾妹あかこまが あがきはやけはくもにも かくりゆかむ ぞそでまけわさも (十一・

二五一〇)

の如き用例を加味し、併せて、卷八の一六三四番の傍証歌を考慮すれば、上三句よりの続き具合の關係とも相俟つて、第四句は「シダリヤナギゾ」と施訓するのが妥当ではあるまいか。

(五)

万葉集の用字法が他の上代文献に比し、複雑多岐なることは既述したところであるが、それだけに同一文字においても表語文字としての用法であるか、訓仮名として用ゐたのであるか、その訓仮名もいかなる訓を借りたものか決定しなければならぬし、或いは、現在の固定した訓み以外の訓をしなければならぬこともあり、表語文字としての用法と考へられてゐた用法も意外に字音仮名としての表記

に使用されてゐることもあらう。かかる点を考慮してみると、集中の訓も再考してみる必要もあると思ふ。したがつて、この項では以上の諸点から、例を挙げて考察することにする。

(1)

常磐成石室者今毛安里家礼騰住家類人曾常無里家留いはやはいまもりけれとすみけるひとぞつねなりける

(三・三〇八)

右の歌は題詞によれば博通法師が紀伊国へ行き、三穗の石室を見て作つた三首中の中の一詩であるが、第一句については、トキハナル(類・古・紀の諸本・考・新考・口訳・大系・注釈・新校・三氏万葉等)、トキハナス(紀州本朱筆、西以下の諸本の仙覚新点、代精、宣長・久老、古義、總釈・私注等)の両訓があるが、最近ではトキハナルの訓に固定した感がある。おそらく、トキハナスと訓めば「床磐ノゴトク」の意なり、岩屋を岩にたとふべきにあらねば此訓はかなひ難し」といふ新考の言の如く考へられるからであらうか、最近の注釈書にはトキハナスの訓は捨て去られてゐる。トキハナルと訓めば「トキハニアル」即ち「永久に存在する」といふ意になるから「常磐成」の「成」は「ニアル」の融合した「ナル」の表記に用ゐられた訓仮名といふことになる。ところが、万葉集の用字法から見た場合、成・生をそのやうに訓仮名として用ゐられた確例を見ないのである。

明日香には乳鳥鳴成ちどりなななりつま待かねて (二・二六八)

川よどに鴨曾鳴成山かげにして(三・三七五)

沖つ渚に鳴成鶴乃あかときの声(六・一〇〇〇)

佐保川に鳴成智鳥：(七・二二五一)

わた中に鹿子曾鳴成あはれその水手(七・一四一七)

ほととぎす鳴而去成あはれその鳥(九・一七五六)

佐保のうちへ鳴往成者誰呼ぶこ鳥(十・一八二七)

雲の上に今夜喧成国へかも行く(十・二二三〇)

さを鹿の鳴成音毛うらぶれにけり(十・二二四四)

かしこけど小牡鹿鳴成妻の目をほり(十・二二四九)

など鹿の和備鳴爲成(十・二二五四)

行く水に川津鳴成(十・二二六二)

夕さらず河蝦鳴成みわ川の：(十・二二三二)

あかとときと鶏鳴成(十一・二八〇〇)

里とよみ鳴成鶏よびたてて：(十一・二八〇三・一云)

朝けには和備旦鳴成にはつ鳥さへ(十二・三〇九四)

の如く、伝聞推定と言はれる終止形接続の「なり」の表記にはあてられても、正訓文字といはれる実字即ち表語文字以外に、断定を表はす助動詞や所謂形容動詞の活用語尾「なり」の表記に用ゐられた例を見ないのである。先年、春日和男博士が指摘されたやうに「いはゆる伝聞推定の助

動詞「なり」の原形について(国語学23輯)、断定を表は

す「なり」の表記には字音仮名表記の場合を除くと「爾

有」「爾在」「有」「在」を当てて、伝聞推定といはれる

助動詞の表記には「鳴」「動」などの音に關係した意を有

する文字と、前掲した「成」に限られ、訓仮名における両

者の表記は截然と區別されてゐる。そこには上代人の言語

意識に基いた用字意識や表記意識が伺はれるわけである

が、訓仮名「成」字による明確な表記の區別については、正

確な訓詁がなされてゐなかつたため、或程度保留された状

態であつた。だが、最近田島光平氏によつて、疑問を投げ

かけられた。^⑥私は、すでに十年も以前に例外と見られる例

は訓詁の誤りであること、或いは本文推定の不備であるこ

とを確信してゐたところである。例外と見られる例は、今

問題にしてゐる「常磐成(三〇八)」の例をはじめとして、

(1)夜のほろ出てつつ来らく遍多数成者わが胸たちやく

ごとし(四・七五五)

(2)我妹子が夜とでの姿見てしより情空成地はふめども

(十二・二九五二)

(3)藤なみの影成海之底きよみしづく石をも珠とぞあが

見る(十九・四一九九)

などである。(1)はナレバと訓むところであり、成は動詞ナルを表記した表語文字である。したがつて、これは例外から除外すべきこと明白であらう。(2)は例へば

たもとほり往きみの里に妹をおきて心空在土はふめども
(十一・二五四一)

の歌と対照して、まさに指定(形容動詞の活用語尾)の助動詞を表記した恰好の例と思へる。けれども、さう断定するのは早計にすぎる。といふのは「情空成(二九五二)」の成は細井本、活字無訓本・附訓本・寛永版本に成となつてゐるのであり、元西神温矢京は「有」に作つてゐる。当然有字の写本に従ふべきで、これとて例外ではない。(3)の「影成」は「カゲナル」と訓んでゐるのもあるが、これは「カゲナス」としてゐる注釈書によるべきである。したがつて、現在「成」を指定の助動詞に用ゐたと見なされる例は今問題にしてゐる「常磐成」の一例であり、しかも「トキハナル」の訓を認めて、これだけが唯一の例外となるのである。「トキハナル」と施訓すれば、諸注にも解く如く、又、

等伎波奈流松のさ枝を…(二十・四五〇一)

石辺山常石有命なれやも恋つつをらむ(十一・二四四四)
の例でもわかるやうに、「永久に存続するやうな」といふ意味で、下の「石室」を修飾してゐることは明らかである。つまり、「トキハナス」と訓んだ場合は「常石の如く」が岩を例へるべきではないからといふ見解により、トキハナルと訓み、岩室を修飾したものと考へたわけであらう。

しかし、トキハナスは多くの注釈書が言ふやうに「常磐の如く」と見るべきではあるが、

等伎波奈周かくしもがもと(五・八〇五)

時齒成我は通はむ(七・一二三四)

常磐奈須いやさかはえに(十八・四二二)

の例によつてもわかるやうに、トキハナスは岩を修飾したのでもなければ、岩を例へたのでもない。「ときはの如く」即ち「永久に」と下の用言にかかることは歴然としてをり、三〇八番の「常磐成」は石室を修飾したのではなく、安里家礼騰にかかるのである。意味的にもこの歌は、

はだすき久米の若子がいましける三穂の石室は見れどあかぬかも(三・三〇七)

の例でわかるやうに、当時、口碑に伝へられた伝説に基いて詠まれたのであり、

大汝少彦名のいましけむ志都の石室は幾代へぬらむ(三・三五五)

などの例の存在からしても、久米の若子は顕宗天皇か久米仙人か或いは久米氏の若者の誰か不明ではあるが、ともかく遠い昔の伝説とともに伝はる石室が今も尚あるのを「常磐成」といつてゐるのであり、トキハナスと訓んで自然に理會され、一首にもふさはしい。私注のやうに「ときはで

常に交らぬ岩屋は今も昔のままに有るけれど」と解するからこそ、例へば新考や注釈のやうな考へも生じるのであつて、私注は「トキハナス」のナスを誤解したやうである。

ここは古義の「久しき年代を経たけれど、三穂石室は常磐の如くに猶存りてありけれど」と解するのが、最も当を得た解釈と見なされる。されば、成字の訓仮名としての用法における唯一の例外であつた「常磐成(三〇八)」もトキハナスと用まれて例外でなくなるのである。万葉集の用字法や表記者の言語意識・用字意識まで無視してトキハナルと訓む必要はなく、むしろ、トキハナスと訓んでトキハナルの種々の難点も一掃され、正しい訓詁の姿に帰されたと言へよう。

既述してきたやうに、伝聞推定と言はれる助動詞の表記においては、字音仮名表記を除くと「鳴」「動」など意味的に音に係した文字と成に限られてゐることは注目してもよく、成字が訓仮名として、終止形に承接する助動詞「なり」の表記に用ゐられたのは前掲した十六例がすべてであつて、十六例ともに鳴^{ナリ}とともに使用されてゐる。したがつて、同字或いは同種の文字鳴・動を用ゐることには、多少でも漢字に対する素養のあるものには何か反撥する抵抗が感じられるのも当然であらう。そこに成字を訓仮名として、伝聞推定と言はれる助動詞の表記に用ゐられた意図がくみとられ、筆録者の表記意識も伺ふことができ、更に

万葉集における用字法的一端も知ることが出来るやうに思ふ。因みに、成と極めて近似した意を有する生字にしても、断定の助動詞の表記に用ゐられた例はない。そのやうに見られナルと訓まれてゐた、

香青生玉藻息津藻(二・一三一人麻呂)

蚊青生玉藻息津藻(二・一三八人麻呂或本歌)

の生も、生は生ふるといふ意味の拡充を意図しての用字とも考へられなくもないが、むしろ、同じ人麻呂歌の

伊久里爾曾深海松生流荒磯爾曾玉藻者生流(二・一三五)

や、

みよしののまきたつやまにあむくおふるやますがのねの

三芳野之真木立山爾青生山菅之根乃(十三・三三九一)が考慮され、三氏万葉集のやうに「カアヲクオフル」と訓むのが秀れてをり、これ又、生字の用字の例外とすべきではない。

(2)

ひとのみるうへはむすびてひとのふぬしたひもこふるひとおぼき
人所見表結人不見裏紐開恋日太(十二・二八五一人

麻呂集)

右の第四句は従来シタヒモアケテと訓まれ、ほとんど異訓をみないのである。強ひてあげれば代匠記精撰本のシタヒモトキテが想起されるほどで、これとて、これまでの諸注釈にはかへり見られることはなかつた。開字は普通アクと

訓むが、ヒラク・サクなどとも訓まれる。したがって、開字に対するアケテは最も即字的な訓であり、疑問ももたれなかつたのであらう。意味上も、例へば新考が「…アケテは解キテなり」といつてゐるごとく「紐をとく」と同意に解して何の抵触もなく、そのまま認められさうである。諸注も「ここは『紐解きあけて』(十一・二四〇六)とあると同じ解き開けてをアケテと言つたと見てよい(注釈)」と述べてゐるのと大同小異で、卷十一の二四〇六番の「紐解開」をヒモトキアケテと訓むか否かは別として、諸注の解する点にほとんど誤はないと見て差支へないやうである。

ところで、紐が結び・解くであることは枚挙に遑のない集中の用例からして明確である。

秋風に比毛等伎安氣奈たならずとも(二十・四二九五)
結ひてし紐を登伎毛安氣奈久爾(十七・三九四八)

の例からすれば「紐をアケル」といふ表現もあり得るやうに見られるが、今挙げた用例はトキアケルであつて、単にアケルとは言つてゐない。むしろ、トキアケルといふ同意の表現には

高麗錦比毛登伎佐氣氏ぬるがへに(十四・三四六五)
夜の紐だに登吉佐氣受之底(十七・三九三八)

松かげに比毛等伎佐久流月近づきぬ(二十・四四六四)
うたかたも比母登吉佐氣底おもほすらめや(十七・三九

四九)

さにつらふ紐解不離我妹子に恋つつをれば(四・五〇

九)

み船はてぬと聞えこば紐解佐氣旦たち走りせむ(五・八九六)

高麗錦紐の結も解不放斎ひてまでど(十二・二九七五)

あかる橘うづに指し紐解放而(十九・四二六六)

などの如く、ヒモトキサクといふのが一般的であり、トキアケルという表現は新しいものではなからうかと思はれる。したがって、人麻呂集歌であることを考慮すると、「裏紐開」に対するシタヒモアケテの訓における一沫の不安は覆ひ難く、人麻呂集歌といふ点を考へれば考へるほど、従来かへり見られなかつた代匠記精撰本のシタヒモトキテの訓がふさはしいやうに思はれてならない。開字は紐を解く場合の表記に用ゐられず、トクと訓めないならいさしらず、同巻の人麻呂歌集に

誰故か君きませるに紐不開寐(十一・二四二四)

の「開」をトクと訓むべき、正に適例が存在することでもあり、加へて、前掲したヒモトキサケズの用例に照合して訓に誤りはないと見られる傍証例

旅の夜の久しくなればさにつらふ紐開不離こふるこの頃(十二・三二四四)

も存在するからして、開をトクと訓み得ることは十分に首肯される。されば、不安や難点のある「シタヒモアケテ」の訓を施すよりも、「紐を解く」といふ用例もさることながら、

秋風に今か今かと比母等伎^{ひもとぎてうら}心まちをるに月かたぶき

ぬ(二十・四三二)

あが恋ひし君きますなり紐^{ひもとぎたまむ}解待(十・二〇四八)

を加味すると、「人の見るうへは結びて」に対する「人の見ぬした紐」であるから、当然開字はトキテと訓むのが自然であらう。したがって、第四句はシタヒモトキテと施訓するのである。ただ、

(イ)垣ほなす人は言ふとも狛錦紐解開公なけなくに(十一

・二四〇五 人麻呂集)

(ロ)狛錦紐解開夕だにしらずある命恋つつかあらむ(十一

・二四〇六 人麻呂集)

の如き、従来「ヒモトキアケシ」「ヒモトキアケテ」と訓まれてゐる例もあるからして、「あけて」を「ときあけて」と同意に考へて、当面の問題も「シタヒモアケテ」と訓んで差支へないやうに思はれる。しかし、上述したやうに紐を単に「あけて」といふ例はなく、かりにこの二首を「トキアケシ」「トキアケテ」と訓むとしても、紐は「結び」「解く」であることを思へば、(イ)(ロ)の二首に「解開」とあるのは当然であるが、開をアクと訓むのとは別問題であ

り、この(イ)(ロ)を例に「裏紐開(二八五一)」を「シタヒモアケテ」と訓むのにはやはり躊躇される。前掲したヒモトキサケテの例を考慮し、ヒモトキアケルの例が新しい歌であることを思ふとき、ヒモトキアケルは新しく起つた表現で、ヒモトキサケテが慣用的な表現法であつたと考へられ、(イ)(ロ)の二首も「ヒモトキサケシ」「ヒモトキサケテ」と訓むのが自然のやうである。「紐ときさけて」に紐をときあける意や紐をときはなつ意も含まれてゐることはいふまでもない。

年のはに梅者開友^{うめはさけとも}:(十・一八五八)

冬こもり春開花^{はるさきはなを}:(十・一八九一 人麻呂集)

本しげく開在花^{ききたるはな}(十・一八九三 人麻呂集)

不信人^{ふしん}如花開^{ごとくはなを}不実成之樹(東大寺諷誦文稿)

などの例があるからして、開はその已然形サケを借りた訓仮名の用法とも見られ、「紐解開」をヒモトキサケシ(テ)と訓む可能性は十分である。「紐解開^{ひもとぎあけし(て)}」として歌一首もより深く理會できるのではあるまいか。それにしても視覚に訴へた場合の意味の拡充を看過することはできない。

(3)

いましはしなのをしげくもわれはなしいもによりては
今時者四名之惜^{いましはしなのをしげくもわれはなしいもによりては}惜^{なしいもによりては}五者無妹丹因者千遍立十方(四・七三二)

この歌の傍線を施した第五句は旧訓チヘニタツトモであつ

たが、代匠記初稿本がチタビタツトモと改訓してより、現在の注釈書はほとんど代匠記初稿本の説を踏襲してゐる。

遍の訓はタビであるから、例へば

一年に二遍ふたたびかよふ君にあらなくに（十二・二〇七七）

大夫の思ひわびつつ遍多たひまねくなげく嘆を（四・六四六）

一日には千遍ちたひまゐりし：（二・一八六）

千遍ちたひぞ我は死にかへらまし（四・六〇三）

あが身は千遍ちたひ死にかへらまし（十一・二三九一）

千遍ちたひぞ告りし潜きする白水郎（七・一三二八、一三〇二）

千遍ちたひの限り恋わたるかも（十・一八九一）

あはむとは千遍ちたひおもへど（十二・三二〇四）

ただ一目あひ見し子ゆゑ千遍ちたひ嘆きつ（十一・二五六五）

のやうに、タビと訓まれるのは普通のことであり、チタビタツトモと訓んでも何等差支へはない。チタビは前述の用例からしても、ヤタビ・ヨロツタビ・フタタビと同様、「数」即ち数へられる回数を表示することはいふまでもない。とすると、評判が「千度も立つ」といふのは少々変に思われる。ここは噂がひどく立つてゐることを言つてゐるのであり、このやうな数で数へられない程度の意即ち量を表はす場合は例へば、

沖つ波知ちへに敵爾ちへに立つとも障あらめやも（十五・三五八三）

恋しけく知ちへに敵爾ちへにつもりぬ（十七・三九七八）

青山のそことも見えず白雲も千重ちへに爾ちへになりきぬ（六・九四二）

四二）

一日にも千重ちへにしくしくにわが恋ふる（十・二三三四）

五百重いほへなみ千重ちへにしくしくに恋ひわたるかも（十一・二四三七）

四三七）

心には千重ちへに百重ももへにおもへれど（十二・二九一〇）

百重ももへに成心は思へど直にあはぬかも（四・四九六）

わが恋は夜昼わかず百重ももへに成心しもへばいたもすべなし（十二・二九〇二）

のやうに、チヘニ・モモヘニと言つてゐる。つまり、チタビとチヘニの相違は英語の many と much とにでも例へられやうか。当面の問題歌は「千度もたくさん」といふ数を示してゐるのではなく、

百爾ももにち千爾ち人はいふとも月草のうつろふ心われ立めやも（十二・三〇五九）

の例を挙げるまでもなく、非常に沢山といふ量的なもので、しきりに評判になることを言つてゐるのであり、チタビでなくチヘニと訓むべきではなからうか。遍は「n」尾韻を有する文字であり、当時の用字法からすれば、例へば、

邊津へつへに遍者（三・二六〇）

いほへかくり
五百遍隠（十・二〇二六 人麻呂集）

の如く、へニの表記に用ゐられることは普通であり、「千遍」をチヘニと訓んでも差支へない。

心には千遍雖念…（十一・二三七二）

は従来「チタビオモヘド」と訓まれてゐたが、意味からすれば注釈が言つてゐるやうに「チヘニオモヘド」と訓むべきであり、千遍をチヘニと訓んだ傍証例である。

情者千遍敷及雖念（十一・二五五二）

の第二句はチヘシクシクニと訓まれてゐるが、遍はヘンであり、「n」尾韻を省略して用ゐたことになる。しかし、卷十一においては、

あふさ わに
相狭丸（二三六二 人麻呂集）

ちへにおもへど
千遍雖念（二三七一 人麻呂集）

おもへりけらし
思篇来師（二五五八）

にこよかに
爾故余漢（二七六二）

わがおもはななくに
吾不念君（二七二八）、
憎不有君（二七二九）、
未厭君

（二八〇二）、
悪有莫君爾（二六五九）

ゆくらむわきも
往覽別毛（二五三六）、
妹待覽蚊（二六三二）、
明覽別裳

（二六六五）

かみにたくらむ
髪爾多久濫（二五四〇）、
在濫子等者（二六〇七）

われはこひなむ
吾者恋南（二五四八）、
面忘南（二五九一）、
聞度南

あはこひなむ
（二六五八）、
吾恋南雄（二七六七）、
多在南（二八二九）

ひとみ てむかも
人見點鴨（二三五三 人麻呂集）

うれむそは
有廉叙波（二四八七 人麻呂集）

ひとみ うちかも
人見兼鴨（二六六五）、
市白兼名（二六八〇）

ちくろく おもへは
解楽念者（二五五八）、
我恋樂者（二七二五）

の如く、「k」「m」「n」等の尾韻を省略して用ゐられた例はなく、へニとこそ用ゐられ、単にへの音を表記するために用ゐられたとは考へられない。「悪有莫君爾（二六五九）」

の君だけは「n」尾韻を省略してクの音を表はしたものであるはれるかもしれないが、これは「n」尾韻が次の爾（ni）の子音「n」と融合してゐるのであり、かかる用例は万葉集のみならず、記・紀においても人名の表記に屢々見られ、決して例外ではない。あへて例外を挙げれば

恨めしと思ひて狭名盤…（十一・二五二二）

であらうか。盤は「n」尾韻を省略して単にハとして用ゐられた例である。しかし、この盤は嘉暦伝承本・紀州本にさうなつてゐるのであり、西本願寺系統の本には磐字に作つてゐる。磐字とすれば、イハのイが上字の母音と融合し、それに吸収されてゐる訓仮名の例であり、例外とは見なされない。訓仮名狭・名とともに用ゐられてゐることを思へば、同一語・同一場所における訓仮名と音仮名の交用は極めて少数の例外を除いて存在しないといふ集中の用字

法の傾向からして、「せなは」のハも訓仮名でありたいところ、ここは西本願寺本の磐に従つて本文を定め、これ又例外から除外すべきであらう。たゞ類（ルイ）を単にル（二五六七・二六六八）の仮名として用ゐた如き例はあるが、かかる用法は、例へば例（レイ）を例として用ゐるのと同じものであり、これらの例をもつて、遍をへの仮名と認め、「千遍敷及」とすべきであるという根拠にすることはできない。類と例をル・レの音仮名と用ゐるのは自ら事情を異にしてゐる。したがつて、「千遍敷及」をチヘシクシクニと訓むのは難点があり、こゝは集中、特に卷十一の用字法に則し、チヘニシクシクと訓むべきものと思はれる。さすれば、この例も千遍をチヘニと訓んだ例になり、初に挙げた七三二番の「千遍立十方」をチヘニタツトモと訓むことは少しも差支へない。むしろ、意味上からチヘニタツトモと施訓してはじめて正鵠を得たものといへよう。

因みに、チヘニ・シクシクニ・イヤシクシクニ及びシクシクの例は皆存在するが、チヘとシクシクが複合して用ゐられた例は、前に考察した二五五二番の歌と

(A) 一日にも千重敷布（十・二二三四）

(B) 五百重波千重敷敷（十一・二四三七）

の三例である。もし、二五五二番の千遍敷及をチヘニシクシクと訓むべきとすれば、前掲した用例を参照してもわかるやうに。千重の表記でニを補読しチヘニと訓むこともあ

り、前掲したときには(A)(B)ともチヘシクシクニと施訓したが、(A)(B)もチヘニシクシクと訓むべきところかもしれない。

(4)

志長鳥居名野乎來者有間山夕霧立宿者無而（七・二一四〇）

右の第五句は本文に異動があり、而字を爲字に作る写本もある。而に作る本文は元類神であり、新点の影響をうけてゐる仙覚本系統の写本西細温矢京などには爲になつてゐる。前者の本文による全註釈・大成（本文篇）・大系・注釈・三氏万葉集などはヤドリハナクテと訓み、後者の本文による代匠記・古義・略解・考・新考・全釈・総釈・新校などはヤドハナクシテと施訓してゐる。

爲字の本文によつて、ヤドハナクシテと訓むとすれば、

一人のみきぬる衣の紐とかば誰かもゆはむ伊敝杼保久之弓（十五・三七二五）

等保久之巨雲居に見ゆる妹が家にいつか至らむ歩め黒駒（十四・三四四一 人麻呂集）

遠有而雲居に見ゆる妹が家に早く至らむ歩め黒駒

（七・二二七一 人麻呂集）

玉くしげみもと山を行しかば面白四手にしへおもほゆ（七・二二四〇）

宇夜宇夜自久相從事波無之天斗卑等乃仇能^期在言^久等

(續紀 二十七詔)

万機密^{きびくして}久志^{くして}天御身不敢賜有礼(右局 十四詔)

の如き、形容詞の連用形に承接した「して」の例もあり、結句にきたイヘトホクシテの傍証例もあるからしてヤドハナクシテの訓に不都合はなさうである。しかし、形容詞の連用形に「して」が承接した場合、家が遠くて(遠いので)・相従ふことは無くて・面しろくて・万機がしげくてのやうに意味的に理由を表はしてをり、問題歌は「宿はないのにさ」といふほどの意味であり、宿の字面もヤドでなくヤドリでなければならず、ヤドハナクシテの訓は歌一首にそぐはない。加へて、ナクシテの如き形容詞の連用形に、もともとサ変動詞と見られるシを介して完了の助動詞つの連用形に接した場合、逆接的な意味をもつことなく、当面の問題歌の結句には当を得ない訓と言ふべきであらう。むしろ、

みどり子のはひたもとほり朝夕^{よび}にねのみぞあが泣く
君無^{まな}二^に四天(三・四五八)

君がためかみし待酒やすの野にひとりや飲まむ友無^{ともなしに}二
思手^{して}(四・五五五)

草香江の入江にあさる葦鶴のあなたづたづし友無^{ともなしに}二指
天(四・五七五)

から衣すそにとりつき泣く子らをおきてぞ来ぬや意母^{おも}
奈之爾志^{なにして}豆(二十・四四〇一)

かしこきや命^{みこと}かがふり明日よりや草^{かえ}がむたねむ伊牟奈^{いむな}
之爾志^{なにして}豆(二十・四三二一)

などの例によつて、ヤドナシニシテと訓みたいところであるが、それにしては「宿者無為」の者字の処置に困る。

そこで、為となつてゐる本文はすべて新点の影響をうけた新しい写本であること、有力な古写本にはすべて而になつてゐることが想起され、爲・而の草体が酷似してゐるところから、仙覚本系の写本ではヤドハナクシテの新点に影響されて爲字に誤写されたのではないかと考へられる。

全註釈・大成(本文篇)・大系・注釈・三氏万葉集など、元類神等の本文に従ひ「宿者無^{やどりはな}而」とした理由も以上の点にあるのではないかと考へられる。ところで、ナクテの如く、形容詞に完了の助動詞てが承接するときには、本来サ変動詞と見なされるしを介してつくのが当時の語法であり、直接に承接するのは当時においては特例であり、

今日よりは可尚^{かへり}里見奈久^{なみなく}大君のしこの御楯と出で立
つ我は(二十・四三七四)

…梶棹も無^な而^なさぶしも(三・二五七、二六〇)

のやうに、その用例も少なく、おそらく第二次的に発生したものと考へられる。加へて、修飾語として下の用言を修

飾はするが、結句にきて述語的に用ゐられることはなく、今問題にしてゐる「宿者無而」に対するナクテの訓は頗る適切を缺いでゐる。当面の問題歌のやうな場合は、集中、

梶竿もなくてさぶしも己具人奈四二（三・二五七）

闇の夜に鳴くなる鶴のよそのみに聞きつつあらむ相跡
羽奈之爾（四・五九二）

我やどの花橘はいたづらに散りかすぐらむ見流比等奈
思爾（十五・三七七九）

常しらぬ道のながてをくれくれといかにか行かむ可利
弓波奈斯爾 一云可例比波奈之爾（五・八八八）

み吉野の青ねが峯の苔むしる誰か織けむ経緯無二（七
・一一二〇）

みわの崎ありそも見えず波立ちぬいづくゆ行かむ與奇
道者無荷（七・一二二六）

のやうに「――なしに」とあり、用例も枚挙に遑なく、詠歎か疑問を表はす文をうけ、表現形式も一一四〇番の歌と一致してゐる。したがつて、従来のやうに為とある本文によつたり、而字を漢字本来の助字的用法をしたものとはしない、本文は元類神によつても而字は音仮名と見なして「宿者無而」としてはどうであらうかと思ふのである。さうすれば「猪名野をやつて来ると有間山に夕霧が立ちこめてしまった（よ）。宿もないのにさ……」と口語訳され、当時

の語法や表現法はたまた一首の歌意にぴつたりである。ヤドリハナシニとさらりと歌ひあげたところに余情があつて、作者の感情も生き生きと感じられる。而字をニの表記にあてた例は、

比苔瑳破而：比苔瑳破而：（神武紀）

伊莽穰而毛あごよ伊莽穰而毛あごよ（神武紀）

立於浮渚在平処此云羽企爾磨梨施邈邈而施施志（神代紀・下）

妍哉此云阿那而惠夜（神代紀・上）

天の川水左閉而照（万葉・十・一九九六）

天地と別れし時ゆおのが妻然叙年而在秋まつ我は（万

葉・十・二〇〇五）

悪憎 而久牟（八十卷華嚴經音義）

などがあり、この点からの抵触はない。表現形式を同じくする

三河の淵瀬もおちずさで刺すに衣手ぬれぬ干兒波無爾（九・一七一七）

秋田かる旅のいほりにしぐれふり我袖ぬれぬ干人無二（十・二三三五）

などの歌を加味し、

まづちをのころはなしに

大夫之心者無而秋はぎの恋のみにやもなづみてありなむ（十・二二二二）^⑦

のやうに「無而」をナシニと訓んだ例が存在することを考慮すると

東路のてこのよび坂越えかねて山にかも寝も夜やどり里波は
奈之爾なしに（十四・三四四二）

の好傍証例と相俟つて、「宿者無而」が難点のない訓であることが理會できるであらう。因みに

敷妙の枕をまきて妹と我と寐ぬる夜者無而年ぞへにける
（十一・二六一五）

の無而もナクテと訓まれてゐるが、

ふる雪の空に消ぬべく恋ふれども相依無月ぞへにける
（十・二三三三）

たちちねの母にまをさば君も我も相鳥羽梨丹年ぞへぬ
べき（十一・二五五七）

などの例に照して、ナシニと訓むべきではなからうか。

（六）

これまで数項にわたつて、上代人の言語意識や用字意識、表記意識に基いた文字用法を万葉集の訓法との関係において考察して、その一端を明らかにしてきたのであるが、万葉集における従来の訓詁の誤りや不備をも少しくは正すことができたと思ふ。しかしながら、与へられた紙数ははるかに超過し、取挙げた例も限定したので、その例は決して多くない。まだ埋もれてゐる例とともに今後の研究と機会

を俟ちたいと思ふ。集中の歌を巻毎に、歌集毎に、作者毎に、或いは一首毎に、些細な点も看過することなく、多角的・立体的に考察を行なへば万葉集の用字法も巻々の用字法も次第にその全貌を我々の眼前に現はすに違ひない。今、小論において考察してきたのはそれらの一面にすぎない。けれども、これらをつつ一つ積み重ねることによつて一歩一歩山の頂上にも近づくことができるであらう。

① 沢瀉久孝博士『「いはばしる」より「いはそそく」へ（万葉古

径三）』、佐竹昭広氏「万葉集本文批評の一方法（万葉四号）」

拙稿「万葉集における語・告・謂・言の訓——表記意識と用字法との関聯において——」（語文研究四・五号）「万葉集における可・応字の用法（万葉五十号）」など参照。

② 佐竹昭広氏「音と光——「玉響」解読の方法——」（国語・国文昭和28年8月）」

③ 拙稿「上代人の表記意識と用字法——特に万葉集における表記の省略される場合——」（熊本女子大学学術紀要15巻1号）」

④ 動詞の借訓仮名による表記においては、活用の範囲において訓読すべく用ゐるのが普通であり、切をキロと訓むやうな表記例はない。強ひて挙げれば「取石池（十・二二六六）」「ぐらゐであるが、この「取石」は統紀の聖武天皇の神龜元年十月の条に「行還至和泉国取石頓宮」と見え、大阪府泉北郡取石村（今の高石町）と考へられてゐる。諸注釈書「トロシ」と訓んではあるが、明確な根拠は示してゐず、当時たして「トロ

シ」と言つたか知り得ない。むしろ、古写本、例へば元神西などに「トリシノイケ」(類は本文な取古に依りトリコノイケとする)と訓んでゐるのを見れば、全注釈のやうに「トリシ」と訓むべきではないかと考へられ、この場合の用例にはなし難い。

⑤それにしても、やはり例外かと思はれる例がないでもない。それは

しましくも一人ありうる毛能爾安礼也しまのむろの木波奈
れてあるらむ ものにあれや はな
礼弓安流良武(十五・三六〇一)

世の中の人のなげきはあひ思はぬ君爾安礼也母秋はぎの散
りへる野辺のはつを花かりほにふきて雪ばなれ遠き国辺の
露霜の寒き山辺に夜杼里世流良牟(十五・三六九一)

の如き「あれや」をうけた「らむ」である。しかし、これは也が係助詞として係の機能を果たしてゐるのでなく、佐伯梅友博士が現在でいふ「——であるからかしら」といふ気持を表はす語であり、古今集においてのみならず、万葉集にも妥当する旨を述べられてゐる如く(かかりか言い切りか)「已然形」やについて「——言語と文芸昭36年3月)、ヤラムの呼応したものでない。連体形で結んでゐるのは強い感動を表はしてゐると見なされる。したがつて、かかる例も例外的存在とはなるまい。

⑥「なり」の表記の意味するもの——万葉集について——(万葉五十三号)

⑦この例についても、ナシニ(代初・考・略解・古義・大系・注

釈)とナクテ(旧訓・全釈・総釈・全註釈・大成(本文)・新校・三氏万葉)の両訓があるが、歌意からするとナシニがふさはしく、

なぐさむる許己呂波奈之爾(十七・三九六九)

なぐさむる心波奈之爾(五・八九八)

などもさることながら、

あまをとめありとは聞けど見にゆかむよしのなければ大夫
のころはなしに ますらを
之情者梨荷たわや女の思ひたわみて：(六〇九三五)

の傍証例からしても「大夫之心者無而」が穏当であらうと考へるのである。

【附記】 本稿は昭和三十八年度文部省科学研究費(各個研究)による研究の一部である。